

# 市井の画家

# 須磨対水

第4回

10月20日(日)から歴史民俗資料館(五月丘1-10-12)で開催しています。特別展「市井に生きた画家 須磨対水」では、多くの画家、関係機関のご協力により、従来一般にはほとんど知られることがなかった画伯の秀作を一堂に集め、皆さんに紹介することができました。

## 描けるものにはなんでも筆を走らせる

前回まで3回にわたって日本画家須磨対水の生涯、また、その作品について紹介してきました。ところが、画伯にはこれとはまた別の面がありました。現在でいうところのグラフィックデザイナーとも表現している面です。

今回の調査では、作品は当然画軸が中心でした。しかし、驚いたことには、お茶碗・鉢・皿といった焼物、膳などの漆器、扇子、木製の香合、さらには家具に至るまで、描くことのできるものには、その材質を問うことなく、絵筆を走らせています。あたかも、身の回りにあるものすべてが画材となっています。



虹の松原の図

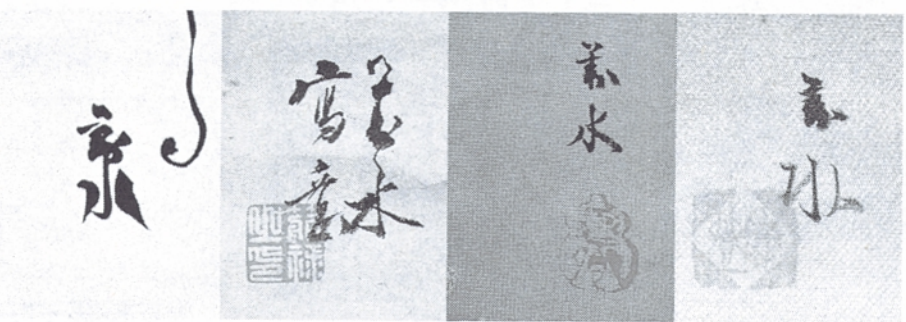
特に、焼き物では、表千家宗匠・生形貴一氏とともに唐津まで赴き、唐津焼のお茶碗ひと窯すべてに絵付けをしたとも聞いています。

このような創作活動は、当時の日本画家にはほとんど見られないことです。つまり、規範を越えた自由、ざん新な思考が画伯の脳裏を満たしていたといえそうです。ただし、この方向は、奇異なものを求めるというのではなく、常に習熟した技量がその背景に伴っていたことを見逃してはならないと思います。今までに述べてきた画伯の気性を彷彿させるよい事例の一つかもしれません。

## 資料館に来ていただく

作品の鑑賞は、人それぞれによつて異なるものです。一つ一つの作品を独立させてみていただくこともできますが、作風の変化を作者の生涯、また、時代背景と重ねてみることも一つの方法です。そこで、画伯の作品に残されている落款(らっかん)「サイン」の形を手掛かりにその制作年代を推定してみます。

落款は「対水」と記したものが現在までの調査では唯一すべてのものです。ところが、それぞれの制作時期により、この落款の字体が異なっています。とくに「水」の字に特徴があります。まず、画伯の前作とすることができ、大正時代の作



<No 1> <No 2> <No 3> <No 4>

っています。力作といわれるものがこの字体をもつものに集中する傾向があります。画伯独自の絶妙な構図の取り方が表れ、以前には見られない細密な筆の運びとなります。今回の展示ではこの時期のものが中心を占めています。

戦後、画伯晩年の作品には、再び水の右はらいが直線的に流れるようになっていきます(No 4)。画風は、余白の占める部分が徐々に後退し、静寂と研ぎ澄まされたような清涼感が全体を覆うようになっていきます。

4回にわたって須磨対水画伯について述べてきましたが、百聞は一見に如かず、ぜひ画伯の作品をご覧いただければと思います。

ところで、皆さんのお手元にもひよつとすると画伯の作品が残されているかもしれません。この落款が「対水」と判読できないことで、作者不明として扱われているのではとも思います。一度調べられてはいかがでしょうか。

※なお、作品は前期(10/20/11/11)と後期(11/13/12/1)に分けてご紹介します。

## 特別展 『市井に生きた画家 須磨対水』

12月1日(日)まで、歴史民俗資料館で。開館時間は午前9時から午後5時まで。火曜日と11月23日(祝)は休館します。

## 記念講演会 『須磨対水の作品の特色』

11月10日(日)午後1時30分、歴史民俗資料館で。講師は村越英明・鉄斎美術館長。問い合わせは同館(51・3019)。

# やがまち 歴史散歩

No.11

## 池田を巡る争乱④

### 池田城の攻防(1)

今回と次回に分けてご紹介する「池田城の攻防」は、池田をめぐる争乱の中で最も凄惨な、かつ、長期間にわたって繰り広げられた戦いです。裏返していうならば、この時期が池田の持つ戦略的な位置が最も重要であったことを示しているといつてもよいと思います。

今回は、その前半戦という意味で、「応仁の乱」を中心にご紹介いたします。

現在、市教育委員会によって、池田城跡の調査が続けられています。池田城の正確な築造時期は今のところ不明ですが、少なくとも15世紀には、その主郭部分は存在していたと考えられます。



空から見た池田城跡

す。閑静な住宅街に姿を変えてはいますが、この城の争奪を巡って、数次にわたる激戦が繰り広げられていたのです。

## 国人池田氏の繁栄

文正元年(1466)相国寺蔭涼軒主季瓊がその日記に池田氏の繁栄ぶりに驚き、当時守護大名に匹敵する経済力を保持するまでに成長していたことを述べています。ちなみに、季瓊は幕府の財政に関与した人物であつて、この記述がもつ意味はたいへん大きなものがあるといえます。当然のことかもしれませんが、京都の貴族から「富貴無双」とまで評されていました。

この時期の城主は、池田充正で、領地の拡大を図るために相当強引なやり方をとっていたといわれています。

当時、池田氏のような在地の武力集団を「国人」と呼んでいました。彼らは、守護大名のもとで、地域支配をゆだねられた領主のことです。摂津には、池田氏以外にも吹田氏、茨木氏、芥川氏などの存在が知られています。

## 池田氏と「応仁の乱」

応仁元年(1467)細川勝元と山名宗全の間に起こった「応仁の乱」は、摂津をはじめ畿内各地を戦場と化しました。この戦いに充正は、細川方として参戦しています。細川方に従軍するため京都へ入った池田軍を見た権大納言近衛政家(のち関白)は、日記に次のように記しています。「摂州の国人池田上洛せしむ。細川被官の者なり。騎上十二騎、野武士千人ばかり也」。いち国人としては破格の陣ぶれであったといえます。野武士千人という数字はあくまでも概数であり、どの程度事実を伝えているかについては疑問がないわけでは

ありませんが、このような多くの傭兵を保持する力をもつていたことを示しています。

## 池田城落城

池田城をめぐる攻防はこれだけでは終わらず、永正5年(1508)4月、細川澄元と高国の間で起こった家督争いは、再び池田城に惨禍をもたらすことになりました。

充正の跡をついだ貞正は、摂津のほとんどの国人が高国についたにもかかわらず、澄元と無二の間柄ということから、「元長卿記」ひとり高国に反旗を翻しました。案の定、同年5月に高国の大軍に池田城は包囲され、貞正をはじめ一族のものが自害し、池田城は落城しました。

池田氏による池田城の奪還には、さらに10年の歳月を必要としました。